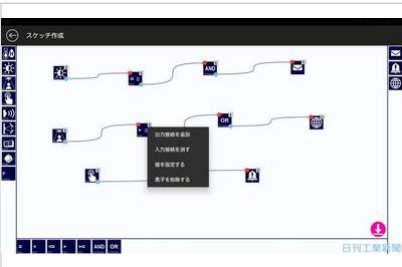


トップ トピックスニュース 記事詳細

[トピックス] Momo IoT

進むIoT利用（39）Momo-手軽に導入 スマホとセンサー連動

ツイート シェア 0 LINEで送る (2017/12/28 05:00)



アプリ内の設定画面。ブロック状の各センサーや条件を線でつなぐ

Momo（大阪市淀川区、大津真人社長、06・7710・2941）は、中小企業などがIoT（モノのインターネット）を手軽に導入できるプラットフォーム（基盤）システムを発売した。複雑な回路設計やプログラミングの作業が不要。スマートフォンなど携帯情報端末から、連携するセンサーを簡易に設定し、感知したデータの通知を受けられる。災害時も通信がつながりやすく、事業所の監視などに訴求する。

利用者はまず専用のアプリを端末上に起動する。6センチ×7センチメートル角の受信用基板をスマホにコネクタで取り付け、数センチメートル角の送信用基板に取り付けたセンサーと連動し、アプリ画面へ情報を更新。センサーは人感、距離、温度、

湿度など8種類。どのような感知水準で通知するかを、ブロック図のように画面に並べる。線でつなぎ構図をつくるだけで、プログラムが完成する。

アプリではセンサーの位置を表示する地図や、感知データなどを確認できる。通信規格には、省電力で約1500メートルの長距離通信が可能なWi-SUNを採用する。

通常は遠距離通信で信号を増殖する中継器（ゲートウェイ）を設置するため、別途アンテナ契約などが必要。しかし、MomoのIoT基盤は端末自体が中継器となり、複数の端末で相互に送受信する無線メッシュネットワークを構成する。いずれかの端末がインターネットに接続していれば他の端末からも接続でき、災害時などの接続障害に強い。大津社長は「30台の端末をパケツリレー式につなげば数十キロメートルまでデータ送信できる」と話す。

センサーの種類に合わせて多様な場面へ応用できる。例えば事業所設備の遠隔監視や、運送会社ではセンサーと発信器を連動させ、運転手のスマホ使用を感知すると警告音を鳴らすことが可能だ。

「IoTを使って課題解決を提案する事業者と連携したい」（大津社長）。IoT活用がこれからの分野で、シェアの拡大を目指している。（大阪・中野恵美子）

ツイート シェア 0 LINEで送る (2017/12/28 05:00)

マイクリップ登録する 紙面イメージで見る 記事を利用する

< 最新記事へ 前へ 次へ 一覧を見る >

あわせて読みたい

マシニングセンターの進化と現状

ようこそ、
jpabscmrnews@abeam.com
(ログイン中)
[ログアウト]

マイページ マイニュース マイ

電子版からのお知らせ

日刊工業新聞社からのお知らせ

最近あなたが読んだ記事

2017/12/28
株式会社ニューフェース/ナレッジ
社長・稲葉雄一氏



カレンダーから探す

12月							2018年01月 ▼
	日	月	火	水	木	金	
			1	2	3	4	5
7		8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20	21
21	22	23	24	25	26	27	28
28	29	30	31				

今日の紙面PDF

